
ウィニペグ留学体験記

三宅 優一郎

University of Manitoba

(順天堂大学医学部附属順天堂医院 小児外科・小児泌尿生殖器外科)



研究室外観

私は細胞科学研究財団より育成助成を頂き、カナダマニトバ州ウィニペグ市にあるマニトバ大学で2021年9月より Visiting researcherとして研究留学をしています。

2020年6月から留学の予定でしたが、COVID-19の影響で一年以上遅れ、2021年9月からの留学となりました。妻、2人の子供と4人での渡加となり、14日間の隔離を経て、カ

ナダでの生活がスタートしました。

ウィニペグはカナダのちょうど真ん中に位置し、夏は最高気温が+30℃を超え、冬は最低気温が-30℃を下回る非常に寒暖差の激しい田舎街です。温かくフレンドリーな人々が多く、夏はキャンプ、冬は川や湖などでスケート、アイスホッケーを楽しんでいます。

留学先はRichard Keijzer教授の研究室で、Keijzer教授は先天性横隔膜ヘルニアにおける肺低形成の病因や、microRNAを用いた胎児治療について精力的に研究されています。私は日本で小児外科医として勤務する中で、肺低形成に伴う肺高血圧症の治療、管理に難渋し、救命困難な横隔膜ヘルニアの児を複数経験しました。出生前に肺低形成の治療を行うことができれば、救命率は格段に向上すると信じ、Keijzer教



凍結した Winnipeg 湖に沈む夕日

授の研究室へ留学を希望しました。

基礎研究に関する知識、技術がほぼない状態での留学で、英語力も不十分であり、留学当初は週1回のmeetingも十分には理解できない状況でした。現在留学して1年弱ですが、非常にsupportiveなKeijzer教授、研究室のメンバーに支えられながら、少しずつですが自分のプロジェクトも進めることができています。

結果を得るまでに費やす時間や、Evidenceのないことを調べていくという臨床とは違う作業に戸惑うことも多く経験しましたが、microRNAを載せたナノ粒子を用いて肺の成熟を促すという非常に興味深い研究を行わせていただき、有意義な研究留学となっています。

また私生活では、臨床医として日本で勤務していた生活とは違い、当直もなく、家族と過ごす時間が増えたことが大きな変化です。子供たちも、慣れない英語環境の中、明るく学校へ通ってくれています。子どもたちが友達と英語で会話しているところを見ると、家族にとっても非常に有意義な留学になっていると改めて感じます。

最後に、このような貴重な留学の機会を与えてくださった順天堂大学小児外科学講座教授山高篤行先生、本財団へのご推薦を頂いた塩野義製薬株式会社研究企画部の山野佳則様に感謝申し上げます。末筆ながら細胞科学研究財団のますますの発展をお祈りいたします。



研究室のメンバーでの食事会（筆者：右側一番奥）